『人文学報』第117号（2021年５月）
（京都大学人文科学研究所）

中国におけるフランス語とアリアンス・フランセーズの役割（抄）

シャルル・グロボワ

以下の抄訳は，1931 年 7 月 14 日から 16 日にかけてパリで行われたアリアンス・フランセーズの総会におけるシャルル・グロボワ（Charles Grosbois, 1893–1972）の講演テクスト *La Langue française en Chine et le Rôle de l'Alliance française* の一部（9–13 頁）を訳出したものである。原著はフランス外交史料館のナント館に所蔵されている。翻訳にあたり，原文におけるイタリック体は，書名の場合には『 』に入れ，一般的な表現の場合には傍点を打って示した。原文における引用符ギュメ（《 》）やダブルクオーテーション（“ ”）は，原則として「 」で示した。〔 〕内は訳者による補足説明である。

本小特集をはじめから読み進めてこられた読者には自明のことであるが，講演者であるグロボワとは，1918 年から 30 年以上の長きにわたり，中国，とりわけ上海フランス租界の教育の発展に大きく貢献した人物であり，戦後は 1953 年から 6 年間，京都の関西日仏学館館長としてフランス語教育・日仏文化交流のために力を尽くした。

一昨年の京大人文研のセミナー「京都における日仏交流史 ―― 関西日仏学館と上海－京都ルート」において，この文書を取り上げることはしなかったが，日中仏文化交流のキーパーソンであるグロボワが 20 世紀初頭の中国をどのように見ていたのかを知るまたとない貴重な史料である点，また，関西日仏学館女子部の初期の活動（1927–36）に光を当てた拙稿「関西日仏学館と女性たち」とも時期が重なり合う点を考慮し，グロボワや当時の時局への理解を深める目的で，小特集の付録として掲載できるようお取り計らいいただいた。不躾なお願いを快く聞き入れてくださった立木康介教授と『人文學報』編集委員会のみなさまに深く感謝したい。

中国におけるフランス語・フランス文化普及の実態および，得られた成果を詳述した 28 ページにわたる長い報告のなかから，今回は中国でフランスの教育者が直面している問題について分析されている箇所を選んだ。政治について，教育について，時代も国も超えて思わず頷いてしまうエピソードが数多く盛り込まれているのだが，注目すべきは，グロボワが表面的な事象の列挙に終始するのではなく，当事者たちの内面に迫ろうとしている点である。彼の透徹

したまなざしは，当時の中国の不安定な情勢，人々の不安や混乱をどのように捉えていたのだろうか。

中国のアリアンス・フランセーズの現在の役割，そして今後果たしていくであろう役割と将来的な計画を一般にどのように実行していくのかという点について検証に取り組む前に，この国でフランス語の普及に努めている人々が働く現場の状況や雰囲気を正確に描き出しておくことも無駄ではないでしょう。

過去の政治団体が残した廃墟を無に帰すること，より正確に言うならば，それを最後のひとかけらまで貪り尽くすこと，すでに崩壊寸前の構築物を打ち砕くことなど容易いことです。それに比べて，再建の方がはるかに難しいのです。中国においては，次の理由により再建は一層困難でした。一つは，過去の精神というのは国政の壊滅によって一新されるものではないためです。いま一つは，中国の人民が，ギルドや商工会議所，福祉事務所，協力援助を行う事業所，地方の組合などの大変緊密で複雑なネットワークによって，自分たちの利益のためだけに諸税を徴収する行政をそれほど気にせず生きることに，ずいぶん昔から慣れてしまっていたという事情があります。また，同様に困難な状況を作り出しているのは，仮に大都市に何らかの新しい思想が入ってきたとしても，人々は体制の変化に気づくことも注意を払うこともなかったという点です。最後に，中国が一つの，間違いなく奥深いまとまりを持った一つの世界であるということが事態をより難しくしています。南京南部の沿岸に広がる地域を除いて，中国人は皆実際のところ同じ言語を話します。仮に広東人が北京人と話すために通訳を必要とする場合でも，書いた途端に彼らは完璧に理解し合うという点を忘れないようにしましょう。しかしながら，この世界では，損得勘定，習慣，風習そのものも非常に多様であり，「おらが村が一番」という精神によって，雲南省と四川省は対立し，福建省は山東省と対立しています。ほとんど自明の理とも言える次の事実は，何度繰り返しても足りません。すなわち，我々にはすでに，ヨーロッパで4000万人の人口がいれば，大国とみなす習慣がついていますが，その4000万人に比べて，中国の4億5000万人のまとまりが示す，より緩慢な反応と発達は，今後も止まることを知らず続いていくということです。中国の危機は始まったばかりにすぎず，1925年から27年にかけて特殊な深刻さを呈したために，回復につながる決定的な沈静化はいまだまったく見込めません。建設の時期というより，まさに破壊の時期にいるわけです。なるほど確かに中枢機関では，南京の国民政府の人々が直接権勢を振るい，新しい組織が生まれ，新しい精神が育まれていることがわかりますが，完成にはほど遠い状態です。いくつかの道標がまだ脆い土地のそこここに立てられ，乗合馬車が一度ならずはまり込んで動けなくなってしまう難儀な道にも標石がいくつか置かれました。国内では，政府の委員会，対立を引き起こす飢えた一群の将，脅しや略奪をしたくてたまらない戦争の指揮官に加え，共産党グループが代わる代わ

る政治に介入するというどうしようもない混乱が起こっています。そして，この共産党グループとはロシア人が密かに訓練し，統率している共産党員たちによって見事に組織されている場合もあれば，破壊や略奪を行うために単に赤い旗をつけている場合もあるのです。

中国の人民は，平和を愛し，器用であり，逆境のなかにあっても驚くべき柔軟性を発揮します。そして並外れた商才によって常に生き生きとしています。しかし同時に，苦しみ，身をかがめ，過去の付けや賠償金を支払いながら，枯れ果てている有様ですが，それでも全体としては「なんとかやって」いるのです。

自然現象は中国の人民にとって，甚大な被害をもたらします。その激しさと言ったら，略奪が一度ならず起こるのだって，洪水，飢饉，旱魃，地震や台風に比べれば恐れるに足りません。これらの言葉は，我々ヨーロッパの人間とほとんど関わりがありません。我々にとっては非現実的なことにすぎませんが，中国人にとっては，どれもおぞましい現実なのです。人々が，草がないといって土を喰むのを見なければなりませんでした。道沿いにコレラ患者たちが息絶えていました。村々一帯が川に飲み込まれ，泥に埋まっていました。肥沃な土地が瞬く間にして，1 フィートの砂利に覆われてしまうのです。このように言えばよくおわかりいただけるでしょうか。時に突発的な運動として立ち現れる潜在的な苛立ちにいたるところでぶつかるのも驚くべきことではありません。巨大な人の群れが幾人かの指導者の熱のこもった弁舌に感情を爆発させるとしても，中国人たちが，プロパガンダの先導者らが教える単純な決まり文句に絡め取られ，よりよい世界を打ち立てるための呪文のようにそれを繰り返すとしても，驚くようなことではないのです。

ロシア人は自分たちにとって非常に有利な場を中国のなかに見出し，国家主義という口実のもと，眠りかけていた昔の外国嫌いの気質を簡単に呼び覚ましてしまいました。中国人の自尊心に漬け込むのがいかに容易かったことか，中国の不幸は何から何まで，外国人や租界の存在，ないしは数々の「不平等な」条約のせいだと思い込ませたのです！「外国はみんな帝国主義だ」，「租界廃止」，「中国人の中国」，「国家主権」，「外国による中国の破滅」など，決まり文句は稚拙極まりないものですが，イギリス人の言う「キャッチワード」，つまり人を捕らえるトラップに，愚か者たちはたちどころに捕まってしまうのです。

我々の役目は評価を下すことではなく，理解することです。この政治的・社会的な動揺，外国人に対するいびりや不正義の裏には，胸をえぐるようなドラマがあります。中国国内では，民衆は事態をよく理解することもないままあえいでいます。中枢部において，優れた教育を受け，開かれた精神を持つ構成員たちは，自分たちが置かれている状況の重くのしかかる不安と果たすべき務めの膨大さをぼんやりと理解しています。しばしば大衆に混じって叫ばねばならない彼らは，ようやく輪郭を描き出したばかりの計画も不手際一つで台無しになってしまうと

感じています。そして，彼らは中国を占領しようと考えている国家はアメリカにもヨーロッパにもないことを知っています。つまり，外国人によってではなく，むしろ中国の民衆による騒擾や，人々が個人的な強欲さや道楽から抜け出せなくなっていることによって，国から与えられた自分たちの特権が脅かされていると感じているだけに，ますますそれに執着するのです。国民性に由来するこの偏狭なこだわりは，最近打ち出された合言葉の一つ「知識層による中国侵略」のうちに見出されますが，これは特に我々の興味を引くものです。このスローガンのために，宣教師らと同様に，宗教色を持たない教授たちも非難されました。政府の人間が一笑に付すとしても，野放しにされた学生集団は，受験を拒否したり，教授を排斥したり，ストライキを起こしたりするために必ずそれを使うのです。中国で公教育を行うために，成しうる限りの，あらゆる手を尽くさなければなりません。そしてその第一歩は，何よりもまず古い行政施設の秩序を取り戻すことにあります。再建について考えるのはその後でよいのです。ここでも，評価を下すのではなく，理解するようにしましょう。公衆の面前で雄弁に語る学生は，革命という革命を潜り抜けており，彼の誇張のなかに，冗談のなかにさえ，おおらかな共感があるのです。より厄介なのは，こうした学生が学校や大学の管理，教授の選定やプログラムの決定に介入したがる場合です。

中国人学生の心理の全容を云々することはあまりに遠大なものになるでしょうが，非常に一般的な概念の十全な理解のために，そのなかから注目すべき二つの特徴を挙げたいと思います。まず，中国人学生は何よりも実益を追求します。彼らは学んだことを利用することにこだわります。言い換えれば，それを現金化することにこだわるのです。純粋な学問もしくは哲学的な思索のみにふける若者は本当に稀です。彼らは知識よりも技巧に興味を抱きます。たとえ現状において，できる限り急ぐ必要があるとしても，同様に次の点も強調して然るべきでしょう。すなわち，練り直す段になってより長い時間を要するのは，技能ではなく，深くまで考え抜く精神のあり方だということです。そして，中国人学生は年長者よりも強く「自分の面子」にこだわります。この特殊な名誉心の一種はまた，とても複雑であり，極東における多くの奇妙さと矛盾を説明するものです。「中国人はどのような場合に面子を失うことを良しとするのか」。これは，上海で発行されている民族主義雑誌の一つ『チャイナ・クリティック』誌の最近の号に見られた文句です。「西洋人が一人いたとする」と記者は書いています。「彼は侮辱されるがままになるようなことがあれば，名誉を失うことになる。中国人は，名誉を失ったとしても面子は守る。ある女歌手のもとに通う中国の将軍の息子は侮辱される。すると彼女を逮捕し，その家を閉めてしまうよう命じることによって，彼は面子を守るのである。しかし名誉が保たれたとは言えないだろう」。学生が試験や選抜という基本方針を受け入れないのは，まさに自分の面子を保つためなのです。ある技術学校の生徒が，作業場で実習を行うために〔見習いの段

階である〕「青」を卒業することを拒否するのも，自分の面子を守るためですし，同じ理由から，教員に補足的な説明を求めることを嫌がります。自分の課程の教科科目を表面的にしか学ばず，博物誌に関しては，それが生理学，解剖学，動物学，もしくは生物学と名付けられた場合にのみ受け入れるのも面子を守るためなのです。頭の回転の早さ，いえ計算高さとも言えるでしょうが，「面子」は，彼らが深く考えることを妨げているのです。

一般に教育者が対峙している種々の困難さを明示するにはあまりに短い本報告のなかで我々はあれこれと言及しすぎました。こうした困難とはとりわけ，神経質で攻撃的，反抗的である反面，感じやすく，いかがわしい政治思想の宣伝機関に煽られて縦横無尽に飛び回るような人々をフランス語とフランス思想へ導こうとする教育者が直面している問題です。彼らは気まぐれで自堕落なうえ，面倒を引き起こしますが，しかし自分たちの国のために何かしたい，何か学びたいというある種の意思によって，より正確に言うならば，国のためになるような直接的な行動と結びつかないもやもやした気持ちによって突き動かされているのです。なるほど，仕事は確かに困難で相応の報いを期待できるものではありません。しかしながら，すでに得られている成果は，この仕事が展開し，実り多いものとなることを十分に示しています。そのためには冷静さと忍耐，方法論，とりわけ中国に暮らしたことのある人，中国をいくらか知っている人，そうした人々が皆心の奥底で揺らぐことなく抱いている中国に対する大きな友愛が必要なのです。

（藤野志織訳）

* 翻訳の完成にあたっては，趙怡教授，および友人のロレダナ・スコルシさんに多くのご助言をいただいた。最終的な責任は訳者にあるが，ここに記して感謝を捧げたい。